

出典：慶應義塾大学・法・98年

解答

日本では個人は長い間、西欧的個人である前に、自分の属する人間関係である「世間」の一員であった。それ故、公の場では個人として自分の意見を述べる前に「世間」人として発言しなければならず、個人と「世間」の関係の中で本音と建前の区別が生まれた。この区別は、明治以降の近代化・西欧化との関係において顕著になった。欧米の圧倒的な文明の力を前にして、日本は欧米の諸制度を取り入れる一方、人と人との関係は従来そのまま、「世間」が生き残ったのである。その結果、人々は公的な場で発言する際は欧米流の内容を主とし、公的な場を離れた時には自分の「世間」に即して本音で発言した。大切なことは、当時も今も「世間」は隠されており、人々はあらゆる分野で二重生活を余儀なくされるという点だ。言葉は言葉それ自体として受け止められず、その背後にある真の意図が常に探し求められる。公的な場での発言も、私的生活領域である「世間」に根ざした言葉の本音ならば信用される。

私は以上のような筆者の主張の中に、現在の日本の問題をクリアにする視点が内包されていると考える。今現在の日本の社会は、法・経済・教育制度といった外枠は近代化・西欧化されていたとしても、個人のあり方や人間関係は前近代的で「近代的個人」の確立は不十分……ということだろう。言い換えれば、外側は「近代化」済のレッテルが貼られていても中身は前近代的的精神構造の人間がほとんど、ということだ。

もちろん全ての人間がそうとは言いきれない。しかし明治以降のそうした「二重性」を根強く残し、それに強く問題意識を持たず生きていく人々の存在を日常茶飯の如く目にする、日本には真に独立した個人など育たないし、民主主義なども根づかぬのではないかと悲観的にならざるを得ない。公的な場では「男女平等」「男女雇用機会均等」の徹底を言っておきながら、その舌の根も乾かぬ内に「やはり女は子供を産んでやっと一人前」と「本音」を言った政治家の発言が、同僚議員や財政界のいわゆる身内意識の強い人間関係

の中では、全く議論にならなかったこともある。そうした「本音」が「個人」として独自に立とうとする人々の意欲や権利を摘み取ってしまふ危険性を持つことに対して、何の問題意識も感じず不問に付してしまふ日本の社会の鈍感さを、私達は今、議論の対象としなければならぬのだと考える。

解説

1 出題意図

慶應義塾大学法学部の論述力（小論文）テストの問題用紙第一ページには、毎年、小論文課題で受験生のいかなる能力を評価・判断するつもりなのか、明示されている。

- (a) 読解資料（課題文）の理解力【文章読解力】
- (b) 文章理解に基づく自己の所見を論理的に組み立てる構成力【論理的思考力及び文章構成力】
- (c) 論述に個性的・独創的発想を盛り込む力【独創性・発想力】
- (d) 正確で豊かに書く表現力【文章表現力】

課題文型小論文が出題される場合、大学によってどの評価項目に比重を置くか多少違いはあるが、基本的には、右のような点をいとも意識して答案に向かう必要がある。つまり、ただ漠然と課題に取り組むのではなく、大学側が自分の提出する答案から何を見、何を評価しようとするのか意識した取り組み・答案作成が望ましい。なお本課題は、慶大法学部98年度のものであり、「建前と本音」という、私達にとってはごくありふれたテーマを切り口とし、明治以降の日本の社会について考察・分析させようとする課題である。法学部でありながら、人文科学・社会科学いずれの領域にも過剰に偏らない方針で問題が作成されている点において、慶大法学部の小論文課題は、課題文型小論文のオーソドックスな出題パターンとしてみなされている。設問形式も、テーマ・内容も、人文科学・社会科学両方の志望者に十分対応する課題である。本課題を、課題文型小論文への取り組み方の基本確認に活用してほしい。

2 設問要求

- ① 課題文を読み、明治以降の我が国における「建前と本音」についての筆者の考え方を五〇〇字程度で要約する。
- ② ①の内容と関連づけながら、自分の意見を論述する。
- ③ ①・②を一〇〇〇字以内にまとめる。

3 設問分析

① 課題文の理解力を重視している設問文

課題文読解型の課題に取り組み基本的作業のスタートは、まず設問文を熟読し、その要求を把握することだ。本課題では、課題文の内容というより筆者の考え方を要約するよう明確に指示されており、その字数まで「五〇〇字程度」と明記されている。要するに、一〇〇〇字の半分程度は要約に費やしてよく、読解した成果を形（要約文）にして表現させ、課題文の理解力を評価しようという大側の狙いを明確にしている。課題文読解型の場合、課題文の内容や筆者の見解をどの程度踏まえるべきか（要約すべきなのか）、それとも、あくまで課題文を読んだことやその内容を参考にして論考したことが読み手（採点官）にわかるようにする程度でよいのか、悩んでしまうような設問文がある。慶大法学部の場合、96年度までは、「次の文章を読み、くについて論じよ」という、論述すべきテーマを与えるだけで、課題文の内容理解をどう表すかは自由であった。しかし、近年では要約の形で読解力をアピールするよう、設問文中に要求されているものが多い。

② 筆者の考えと関連した論述を書く——課題文筆者と双方向的な議論を展開するつもりで

論述すべきテーマは、設問文が指示するように「明治以降の我が国における『建前と本音』」である。そのテーマに対する筆者の論点・視点の概要は、要約する際に把握できるだろう。ここで言う筆者の論点・視点とは、筆者が、「明治以降の我が国における『建前と本音』」の何が特に論ずべき点であり、なぜ今それに問題意識を持つのか、それに注目することによどのような意義があると考えられるのか、ということである。そうしたことの理解を起点として、今度は君達自身が自分なりの論点・視点・具体的事例を提示し、課題文筆者と議論のやりとりをするつもりで、自分の考えたことを文章化してほしい。設問文にはわざわざ「（要約した）その内容と

関連づけながら、あなたの意見を述べなさい」とある。要するに、議論の相手が何を言っているかおかまいなしに自分の考えを述べような、議論の噛み合わない論者にはならぬよう心がける必要がある。自分の考えをただ一方的に「発信」するのではなく、議論の相手の発信するものを正確に誠実に「受信」し、それを自分が考察していく土台・素材として活用していこうとする姿勢を持った「発信者」でありたい。

4 論述へのアプローチ

① 課題文を読み、明治以降の我が国における「建前と本音」についての筆者の考え方を押さえる

(1) 課題文の構造

意味段落Ⅰ 論点提示：第①段落・第②段落

筆者の提示する論点……我が国における建前と本音の区別

◆「建前と本音」の区別の発生メカニズム

- (a) 日本では個人は長い間西欧的個人である以前に、自分が属する人間関係Ⅱ「世間」の一員であった。
- (b) それ故、個人として自分の意見を述べる前に「世間」人として発言しなければならなかったⅡ自分自身の意見は本音として「世間」の蔭に隠れていた。

(c) 「世間」と個人の間関係の中で、「世間」を代弁する発言の建前と、自分自身の意見である本音の区別が発生。

◆「建前と本音」の区別が顕在化された時期・要因

- (d) その時期・状況Ⅱ明治以降の日本の近代化・西欧化との関係の中において。
- (e) 「区別」顕在化の要因Ⅱその近代化・西欧化は、組織や制度等の「表面の近代化」に過ぎなかったこと。

意味段落Ⅱ 論証：第③段落～第⑧段落

日本において「建前と本音」の区別が生まれたことのさらなる検証作業

◆我が国特有の状況Ⅱ制度の近代化の一方、従来の個人のあり方の残存する状況

- (f) 欧米の圧倒的文明の力を前にして、明治以降に日本は欧米の諸制度を取り入れる一方、人と人との関係は従来の形のま

ま〓「世間」の残存

◆近代的諸制度の中に伝統的人間関係である「世間」が残存したことによる影響〓建前と本音の世界の区別

(g) 政治家も学者も文化人も公的な場で発言する際には常に欧米流の内容を主とし、公的な場を離れた時には自分の「世間」に即して本音で発言。

←

明治以降の日本の理念の世界と本音の場の世界〓二つの極

意味段落Ⅲ 結論：第⑨段落・第⑩段落

日本における「建前と本音」の区別に関する筆者の主張・問題意識

◆日本の近代化がもたらした最大の問題との関わり

(h) 当時も今も「世間」は隠されており、人々はあらゆる分野においてあたかも建前の世界だけで生きているかのように振る舞うかのような二重生活を余儀なくされる。

(i) 【日本の近代化のもたらした最大の問題としての建前と本音の二重性】
言葉は言葉それ自体として受け止められず、その背後にある真の意図が常に探し求められる。

←

(j) 本音〓私的生活領域「世間」に根ざした発言

公的な場での発言も、その「世間」に根ざした言葉である本音が信用される。

(2) 要約文の作成

課題文を読めばわかるように、同じことを繰り返し言及している部分が多い。したがって、筆者が「明治以降の我が国における『建前と本音』」について、どのように考え、論を展開しているのか、君達自身が整理していくつもりで（ただし元の文章の流れ・キーワードは活かして）、要約文を作成したい。

押さえるべきポイントを、前項「(1) 課題文の構造」の(a)から(j)の一〇項目に整理してみた。これらをわかりやすく自然な文

で、五〇〇字程度でまとめればよい。五〇〇字という字数はあくまでも目安であり、五〇〇字を全て要約に使わねばならぬ、というわけではない。押さえるべきポイントが欠けることなくうまくまとめられていさえすれば、字数はあまり関係ない（ただし、五〇〇字から大幅に字数オーバーすることは避けたい。その後の自分自身の論述が、十分展開できなくなる）。

② 課題文の内容・筆者の考え方に関連づけて、自分の意見を論述する

(1) 課題文の内容からどう論を起すか

要約文で押さえてきた内容の中で、君達自身の論述の展開の構想を練る際、特に関連づけ（焦点をあてるべき点をいくつか挙げておきたい。もちろんこれが全てではない。君達独自の読みに基づき、そこから考察を加え、課題文の内容と関連性を持つ論述が展開できるのであれば、それはそれでよい。

課題文の中で筆者が論じていることのかかなりの部分は、「明治以降の我が国における『建前と本音』」、すなわち筆者が言うところの、近代以降の日本社会の最大の問題である「二重性」が、いかに発生・形成されてきたかの、筆者なりの説明である。その説明やその説明の仕方に内在する筆者の視点等に、君自身納得できるか、疑問を見出す部分がないかどうか、まず考えよう。

また、その「建前と本音」という二重性は、明治の時代の「表面の近代化」、すなわち欧米の諸制度を取り入れる一方で、個人のあり方や人と人との関係において従来の形、つまり「世間」を残してきた結果である。言い換えれば、経済・法・教育制度といった「外枠」は近代化されても、個人の内面や人と人との関わりは前近代を引きずり、そしてそれは今現在も同様である、と筆者が考えていることである。ではその「二重性」が本場に現在の日本の社会に存在するのか、君自身も検証してみるとよい。そしてその検証作業から具体的事例を見出し、それを分析することから、その「二重性」がどのような問題を発生させ、それに対して人々はどのように対応しているのか……と、現代社会の構造や本質を探ってみよう。

さらに、筆者は「個人」「世間」「社会」（あるいは国家）の関係をベースにして、「建前と本音」の二重生活を余儀なくされている近代以降の日本社会の状況を認識しようとしている。特に、「世間」という私的領域に着目し、近代以前はその「世間」を代弁する発言が「建前」であったのに、近代以降はその私的領域である「世間」に根ざした発言が「本音」となり、公的な場面での発言が「建前」となった推移を記述している。この記述から、前近代から現在までの時間の経過の中で、日本の社会に生きる人々が、「個人」と「社会」の狭間に存在する、直接自分がその存在を確認し、時間・空間を感覚的に共有できる私的共同体

を軸にして生きてきたことが、明らかになる。言い換えれば、「個人」でもなければ「社会」でもない「世間」にその行動・発言を規定されてしまう、日本社会にはびこる「世間」中心主義的な意識のあり方がクローズアップされているのだ。当然、その点に関しては考えなければならないだろう。

(2) その他のアプローチ

「今何故、明治以降の日本の『建前と本音』というテーマなのか」という、出題者側の狙いを自ら問うてみることに、また、現在の状況の成り立ちを過去に遡って解明しようとする時間軸からの分析的アプローチの必要性（特に、わざわざ「明治以降」と設問文で言及されている点に着目するなら）も存在する。

また、個人と社会の関係、「私」と「公」の関係を「建前と本音」という切り口から独自の素材を用いて論じたり、「建前と本音」を乖離させている人間の例として、課題文では政治家・学者・文化人が槍玉にあげられているが、自分も含めた一般市民はどうだろうか……といった視点からも、論述を展開していけるだろう。

(3) 自分の論述をする際の注意事項

指定字数一〇〇〇字の中で、五〇〇字の要約をした上で、その内容と関連づけた自分の論述を残った字数で展開していかなければならない。つまり、自分の論述を五〇〇字前後の字数の中でまとめなくてはならないということだ。八〇〇字や一〇〇〇字全てを論述に費やすことが可能な課題に慣れてしまっている者にとっては、いささか大変である。限られた字数の中で自分の考えたこと・主張したいことをうまくおさめる方が、実は、構想を練り言葉を吟味する時間を要する。あまり多くを語ろうとせず、論点を絞り込み、明快な結論を導きたい。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--